

# 続・ふるさと こばれ話

## 福田たねの父・豊吉

福田たねは、明治の天才画家青木繁を支えた当町出身の女性である。その父を豊吉といふ。本欄でも「三餘師徳の碑」で紹介したが、ここで改めて豊吉について紹介したい。

豊吉は、万延元年（1860）日光で旅館業を営む福田

久次の四男として生まれた。

たねが、初めて絵を日光在住の洋画家五百城文哉に学んだのは、父豊吉のすすめであつたからに他ならなかつたが、

背景には日光出身ゆえ五百

城文哉の力量を知つていたものと思われ、また、実家が幼いたねの面倒を見てくれるだ

らうとの期待感があつたものとも思われる。

豊吉は、幼い頃に輪王寺住職の彦坂謙厚より漢学を学んだ。後に漢学者といわれる

のは、このことにより漢学を通じていたからであろう。明治

14年（1881）栃木県師範学校検定により、栃木県教員免許を取得。翌15年（1882）、当時の瑞穂野村（現宇都宮市）上桑島小学校の訓導になり教員の道を歩き始めた。豊吉は、教育の情熱に燃えた青年教師だつたようだ。

勉学の志を持つ地元の青年を対象とした学習会である「三餘学会」を開いて青年の教育にもあたつた。三餘学会は、水橋村に移つてからも続けられた。明治17年（1884）、豊吉は水沼重助の二女チヨと結婚。翌年たねが生まれた。

明治21年（1888）豊吉は、水橋村に転勤、西水沼尋常小学校西高橋文教場の訓導となる。ここでの教員生活は、決して生やさしいものではなかつたようである。就学率、特に女子就学率の低さに嘆いていたようだ。こうした教師として青木繁が、福田家にきて、青木が傑作「わだみのいろこの宮」を制作するのは、明治40年（1907）である。当時、豊吉は呉服商であった。そうしたことから豊吉については、呉服商として紹介されているが、前に述べたことから思うと、むしろ教育者として紹介されるべきである。教育に熱心であったからこそ、次代に生きようとする娘たねと青木のよき理解者となつたのではないか。

## 第38回

■生涯学習課総合情報館推進係  
【☎028(677)2525】



Bambusicola thoracica  
(胸に模様のある竹林に住む鳥)

人家に近い里山や屋敷林に多い野鳥であるが、戦後にGHQの将校が神戸に駐在していたときに、食肉用として香港から持ち込んで飼育していたものが野生化したとの説がある。

今では、ヤマドリやキジとともに放鳥事業で県が野山に放すために全国的によく見られる野鳥である。

丸い体で尾が短く、頭上から体上面は褐色の地に黒い横斑がある。頬から肩と尾は赤褐色で、眉斑と胸は青灰色である。

習性は家族生活で雌雄共同で、常に子どもを7~8羽連れて歩き、採餌する。「チョトコイ、チョトコイ」と大きな声で鳴き、人が接近するとバタバタと急に飛び出す。

■編集 芳賀町広報広聴委員会  
☎028(677)6032 ✉kouhou@town.haga.tochigi.jp  
■発行 芳賀町企画課  
栃木県芳賀町大字祖母井1020番地  
■芳賀町ホームページアドレス  
<http://www.town.haga.tochigi.jp>

（ヒテ）

■芳賀町の携帯サイトはコチラから▶  
QRコード  
<http://www.town.haga.tochigi.jp>



この印刷物は、E3PAのゴールド基準に適合した  
地球環境にやさしい印刷方法で作成されています  
E3PA:環境保護印刷推進協議会  
<http://www.e3pa.com>



100

PRINTED WITH  
SOY INK™

